

近代日本版画家名覧 (1900－1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	西山純子（千葉市美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	森 登（学藝書院）
樋口良一（版画堂）	
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (10)

【し】

塩津米太郎 (しおづ・よねたろう)

1932 (昭和7)年5月の第3回京都工芸美術展に出品。その後、11月の第1回関西創作版画展に木版画《果実を持てる裸婦》《人形》《コップのある静物》《果実のある静物》《温室の見える風景》《電車のある風景》の6点、翌1933年1月の第3回京都創作版画協会展に《温室のある風景》《赤屋根のある風景》《果物のある静物》《コップのある静物》《静物》2点《裸婦》《人形》《年賀状》《風景》の10点を出品した。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12 (1984) (三木)

塩出英雄 (しおで・ひでお) 1912～2001

1912 (明治45)年4月6日、広島県深安郡福山町字鍛冶屋町 (現・福山市城見町) に生まれる。1931年、帝国美術学校 (現・武蔵野美術大学) 日本画科に入学。東京吉祥寺に下宿する。1935年より奥村土牛に師事。1936年、帝国美術学校を卒業、同校の助手となり、後に講師、助教授となる。1937年より再興日本美術院展に出品し、初入選。以後、毎年出品し、1950年には《泉庭》で日本美術院賞 (大観賞)、1969年に《春山》で内閣総理大臣賞を授賞。1970年に院展評議員となる。1963年には母校・武蔵野美術大学教授に就任。1984年に定年退職し、名誉教授号を受ける。退任を控えた1982年には、同大学美術資料館で、翌1983年には故郷の福山で個展を開催。2001 (平成13)年3月20日脳腫瘍のため東京都杉並区の病院にて逝去。版画関係では当時在住していた東京吉祥寺で朴の会が発行した版画集『むさしの風景』其の1 (1938.11) に《遅ノ井》を発表。【文献】『むさしの風景』1 / 「塩出英雄略年譜」『没後3年塩出英雄遺作展』目録 (井原市田中美術館 2004) (加治)

志賀 昇 (しが・のぼる) 1909～1986

1909 (明治42)年に生まれる。志賀直哉の甥。1928年、洋画家石井柏亭らが指導する東京の文化学院美術科に入学し、その後専修科でも画家としての勉強を続ける。文化学院専修科では、1933年4月から肖像画・挿画・図案などに加えて石版・エッチングの講習会を始め、エッチングについては第1回を1933年10月に、第2回を11月にそれぞれ1週間、講師に日本エッチング研究所の西田武雄を招いて開催。第1回 (1933.10.2～7) には在学中の志賀昇を含めた専修科の16名が参加。制作した作品は西田主宰の研究所機関誌『エッチング』第12号 (1933.10) に掲載されている。1986 (昭和61)年に逝去。【文献】志賀昇「奈良時代的小林秀雄さん」『このひとを見よ 小林秀雄全集月報集成』 (新潮社 2015) / 「文化学院第1回講習会」『エッチング』12 (加治)

四方久之助 (しかた・きゅうのすけ)

→原田久之助 (はらだ・きゅうのすけ)

重松徳保 (しげまつ・のりやす)

大分の武藤完一が版画講習会を契機に発行した版画誌『彫りと摺り』(1931～1933)の第6号 (1932.12) に表紙

絵《鉄道線路》を発表。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

重見 到 (しげみ・いたる)

大分の武藤完一が版画講習会を契機に発行した版画誌『彫りと摺り』(1931～1933)の第8号 (1933.6) に裏表紙絵《やかん》を発表。当時、重見は大分で教員をしていたと思われる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

紫水 (しずい)

土井版画店より1937年に木版画《たそがれ (浜離宮)》の刊行があるが、詳細は不明。【文献】『版画堂』目録32 (1997.9) (樋口)

十寒子 (じっかんし)

1930年代の静岡では『かけたつぼ』(1931～1935)、『ゆうかり』(1930～1934)といった版画誌が発行されているが、そんな中で個性豊かな版画誌『版画座』(1932～1934)が発行された。その第1号 (1932.11) に《秋》を発表する。十寒子は号と思われ、姓名は不明。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

品川 工 (しながわ・たくみ) 1908～2009

1908 (明治41)年6月11日新潟県柏崎市に生まれる。本名は関野工。1928年東京府立工芸学校金属科を卒業。銀座で貴金属店を経営していた伯父の紹介で彫金家宇野先眠に師事するも、彫金への関心が薄れ、1931年に兄の品川力 (のちに古書店「ペリカン書房」を経営) と本郷でアメリカン・スタイルの食堂を開く。その頃、モホリ・ナギの著書を読み、板金や針金による作品、紙の造形などを制作していたが、1935年に恩地孝四郎と出会い、親しく交流する中で、版画の制作を強く勧められたという。その後、光村印刷会社、農商省工芸指導所玩具研究室に勤める傍ら、版画制作にも励み、1943年第12回日本版画協会展に《花》、第18回国画展に《郷愁》が初入選。一方で、1944年には板金や針金による作品で個展 (銀座・三越) を開催している。戦後は、1947年の第15回日本版画協会に《春の海》《私の材料》を出品。受賞し、会員に推挙された。また、国画会展にも出品し、同年の第21回展に出品した《海辺》と、翌48年の第22回展に出品した《海辺の幻想》《ヒカリ》で連続して国画奨励賞を受賞し、1949年の第23回展で会員となっている。以後は両展の他、1954年のルガノ国際版画展とサンパウロ・ビエンナーレ展、1956年の現代日本美術展、1957年の東京国際版画ビエンナーレ展など国内外の版画展・美術展にも積極的に出品し、高い評価を得たが、その創作領域は版画に止まらず、青年期に始めた紙彫刻・布絵・オブジェを始め、フォトグラム、モビール、立体など多彩であった。2009 (平成21)年5月31日東京都練馬区で逝去。著書に『たのしい造形 モビール』(美術出版社 1968)、『楽しいペーパークラフト』(講談社 1985) などがある。【文献】「品川工 見えてくる新しいかたち [インタビュー]」『Contemporary Artists Review』11 (1993.11) / 『現代美術の手法 [2] メディアと表現一品川工・山口勝弘』展図録 (練馬区立美術館 1996) / 『日本美術年鑑』平成22年版 (東京文化財研究所 2012) (三木)

篠 頼 (しの・らい)

1942(昭和17)年の第11回日本版画協会展に木版画《山椿》が入選。翌年結成された「日本版画奉公会」に参加する。会員名簿の住所は中野区新山通1ノ44である。【文献】『第十一回版画展目録(日本版画協会) / 『エッチング』123 (三木)

篠崎喜一郎 (しのざき・きいちろう) 1900～1964

1900(明治33)年、栃木県河内郡姿川村(現・宇都宮市)西川田に生まれる。河内郡雀宮尋常高等小学校尋常科卒業後、栃木県師範学校第一部に入学し、1920年同校を卒業。姿川第一尋常小学校に勤務する。1921年、栃木県立宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に赴任してきた川上澄生が、当時たばこ屋「姿屋」を営んでいた篠崎家に仮寓したことにより川上と知り合い、交流を持つようになった。1924年には姿川尋常高等小学校に赴任し、そこで『村の版画』の創立メンバーとなる教師たちと知り合う。この頃、同僚に版画で有名な川上を紹介し、版画の指導をしてもらうことになる。その中の一人である池田信吾と篠崎の二人が中心となって版画誌『村の版画』(1925～1934)を創刊。川上は顧問的な存在であって、池田が編集発行を担当し、篠崎が支えた。その第1号(1925.1)に《午後の通り》と表紙絵、第2号(1925.2)に《寂しい道》《おもちゃ》、第3号(1925.4)に《春》、第4号(1925.7)に《花》と表紙題字、第5号(1925.9)に《軒端》、第6号(1925.11)に《ほゝの木の実》、第7号(1926.1)に《寒空》《賀状》を発表したが、第7号を刊行した後に池田が平石第一尋常小学校へ転勤となったため、当時としては交通不便な事情もあり、地域性の強い同人誌にとって実質の発行責任者を失ったことにより、『村の版画』は休刊に陥る。しかし翌1927年には、池田がより近い宇都宮市内の築瀬尋常小学校に赴任したため1929年に第9・10・11号と復刊。篠崎も再び第8号(1929.1)に《軽便鉄道ノ給炭水所》《賀状》と表紙題字、第9号(1929)に《電柱》、第10号(1929.4)に《葉牡丹》、第11号(1930.7)に《みうがの花》を発表する。同誌は、その後一年半ほど発行にブランクがあった後、第19号(1934.2)まで刊行されたが、篠崎の発表は第[16]号(1932)の《露草》のみであった。1955年の退職後は学校図書館創設など、教育者として多大な功績を残した。1964(昭和39)年逝去。【文献】浜崎礼二「創作版画の地の塩」『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

篠崎春造 (しのざき・しゅんぞう) 1903～1931

1903(明治35)年栃木県河内郡姿川(現・宇都宮市)西川田に生まれる。版画誌『村の版画』(1925～1934)の発行に尽力した篠崎喜一郎の実弟。河内郡雀宮尋常高等小学校尋常科卒業後、栃木県師範学校第一部に入学。1923年に卒業後、姿川第二尋常小学校に勤務する。兄・喜一郎を通して版画誌『村の版画』の存在を知り、通巻2号(1925.2)に《リベ》を発表するが、その後、版画の発表はない。1928年、法学博士を目指して休職し、中央大学に入学するも、卒業を待たずに1931(昭和6)年逝去。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

篠崎昌義 (しのざき・まさよし)

1932年当時、日本エッチング研究所を主宰する西田武

雄は、東京市内の小学校教員を招き、実習を主としたエッチング座談会を開催。その第4回が1933年6月5日に開かれ、東京芝区桜川小学校に教員として勤務していた篠崎も参加。エッチングの描き方、腐食法、プレスの方など直接西田から説明を受ける。その時に制作したと思われるエッチング作品と座談会の詳細が研究所機関誌『エッチング』第8号(1933.6)に掲載されている。また、篠崎はエッチングが小学校の図画教育に適していると考え「児童に最適のエッチング」と題した小文を『エッチング』第9号(1933.7)に寄稿。その後、第13号(1933.11)にも作品を発表している。【文献】『エッチング』8・9・13(加治)

篠原 節 (しのはら・たかし)

長野県下水内郡の小学校教師による下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号(1934.9)に《子守》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

篠原弥夫 (しのはら・みつお)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に在学中、同校生徒が発行した版画誌『刀』に参加。第8輯(1930)に《塔のある風景》、第9輯(1930)に《万里の長城》、第10輯(1931)に《風景》、第11輯(1931)に《札幌植物園》、第12輯(1931)に《風景》を発表。1932年同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

柴 秀夫 (しば・ひでお) 1907～1979

1907(明治40)年、茨城県水海道(現・常総市)に生まれる。上京して商店員をつとめた。一方で木版を独習し、1932(昭和7)年4月に版画の大衆化を目標に掲げて小野忠重らと「新版画集団」を結成した。集団の第1回展(1932.10)に《少女A》《少女B》《青年》など全7点を出品し、その後も第2回展(1933.3)に4点、第3回展(1933.11)に6点、第4回展(1934.6)に5点、第5回展(1935.10)に1点、第6回展(1936.10・最終回展)に9点と、逐次開催の正規の展覧会に毎回出品した。それ以外にも、集団主催の「第1回アンデパンダン展」(1934.6)や「江戸東京風景版画展」(1934.7)、「エノケンとその一座を廻る版画展」(1934.9)などのテーマ展、集団小品展(1934.4、1935.5)にも出品した。また集団発行の機関誌『新版画』の第1号(1932.6)から第10号まで、第12号、第14号から第16号、第18号(1935.12・最終号)に自作の木版画を掲載した。そのうち第2号と第7号の表紙を担当し、木版画で飾った。『新版画』発行と同じ時期に関谷忠雄編集発行の版画誌『牧神』にも版画を寄せた(第23号[1932.7]、第24冊[1937.9]に掲載確認)。「新版画集団」解散(1936.12)後は、1937年3月に版画の絵画的造形の確保を標榜して小野忠重らと5人で「造型版画協会」を結成し、第1回展(1937.6)に《洞む花》《華麗なる喪服》など4点を出品、その後も第2回展(1938.4)、第5回展(1941.4)、第6回展(1942.4)、第8回展(1949.12)、第9回展(1950.7)、第10回展(1951.8)に出品した。1941年に小野忠重と幸地貞子が創立した出版社「双林社」から、『長崎遺響』(1943.3)と『南海漂流譚』(1943.11)を編集して上梓した。戦後は、しばらく版画の制作と発表を続けたが、「新版画集団」と「造型版画協会」の仲間だった清水正博の証言によれば、パステルなどをつくる会社を

経営して業務に追われ、1955年以降創作活動から遠ざかったという。また創作版画をコレクションし、その一部を小野忠重に譲っている。1979年（昭和54）12月19日逝去。【文献】『創作版画誌の系譜』／加治幸子編著『新版版画集団展目録』（『版ニュース』第4号別冊 輝開 1998）／『生誕100年 小野忠重展図録』（町田市立国際版画美術館 2009）（滝沢）

芝海友太郎（しばうみ・ともたろう）

1928（昭和3）年の第9回帝展に版画《裸婦》、翌年の第10回展にも《紅衣の女》が入選。永瀬義郎は《裸婦》について、「版の性質がよく解らない、多分オフセットだらうと思ふが、どうも版の味が工業的でよくない、あれを木版であつたら随分面白いものが出来たらうと思ふ。然し工業的な美術製版乃至美術印刷を創作版画に結びつける事は意義のある事だ。つまり大量製（ママ）産と云ふ点では何物も及ばないと云ふ特点があるからだ」〔『西洋画批評』『アトリエ』5-11〕と評している。その後、1943年に結成された「日本版画奉公会」に参加。会員名簿の住所は小石川区指谷町125である。戦後は児童書の挿絵などを描いていたようであるが、詳細は不明。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『アトリエ』5-11／『エッチング』123（三木）

柴田耕洋（しばた・こうよう）1883～没年不明

1883（明治16）年仙台に生まれる。本名武雄。郷里の先輩熊耳耕年に連れられて上京、尾形月耕の門人となる。山水・人物画を得意とした。1913年第12回美術研精会展に《敗残》を出品して褒状を受ける。1924年の帝展第5回展に《浅草寺の朝》、1926年の第7回展に《花の寛永寺》、1931年の第12回展に《草御堂》を出品。関東大震災の惨状を描いた木版画集『大正震災画集』（絵巻刊行会編・日本版画社発行 1926）に《大正十二年九月一日午前十一時五十八分》《深川方面》2図と制作年不明の木版画《〔夜の舟〕》の制作が知られる。【文献】『LIGHT IN DARKNESS: Women in Japanese Prints of Early Showa (1926 - 1945)』目録 (Fisher Gallery, University of Southern California 1996)／『版画にみる東京風景 - 関東大震災から戦前まで -』図録 (太田区立郷土美術館 2002)／『Bien』45 (芸術出版社 2007.8) (樋口)

柴野民三（しばの・たみぞう）1909～1992

児童文学作家、童謡詩人。1909（明治42）年11月4日、現在の東京都千代田区有楽町2丁目2番地に生れる。錦城商業学校を卒業。1929年に私立大橋図書館に勤務し、児童図書を担当する。北原白秋に師事し、『赤い鳥』などに投稿。子供研究社発行の小川未明主宰による雑誌『お話の木』創刊に際し、大橋図書館を退職し、編集に当たる。後に絵雑誌『コドモノヒカリ』などの児童雑誌の編集に携わる。1949年より児童文学者として童謡や童話などの文筆生活に入る。著書には『ワタシノオテガミ』（春江堂 1942）や『コンチキ号の漂流』（岩崎書店 1968）など多数あり、児童文学界に確かな足跡を残した。1961年には芸術祭奨励賞を受賞。1992（平成4）年4月11日逝去。版画関係は東京吉祥寺において朴の会が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《善福寺》を発表。【文献】渡辺玲子『みんないっしょに：童話作家・柴野民三の足跡』（文芸社 2011）／『20世紀日本人名事典』（日外アソシエーツ 2004）／「柴野民三-Wikipedia」・「柴野民三とは一

コトバンク」(インターネット検索) (加治)

芝村義邦（しばむら・よしくに）1900～1996

1900（明治33）年、山梨県石和に生まれる。旧制成章中学校（現・愛知県立成章高等学校）を始めとして愛知県内の教師を勤めたのち、戦後、時習館高等学校などの校長を歴任。1996（平成8）年に逝去。生前に蒐集した浮世絵や陶磁器などの美術品が田原町（現・田原市）に寄贈され、「芝村義邦コレクション」として愛知県田原市博物館に収蔵されている。版画関係では、青森創作版画研究会夢人社が発行した『さとう・よねじろう蔵書票』第3年第1集 春の集（1936.5）に蔵書票《鳥の図》《静物》を、また同じく夢人社発行の『趣味の蔵書票』第1回（1936.9）に蔵書票《富士》《紋》《人形》を発表している。当時、愛知県豊橋市東八町に在住。【文献】『緑の樹の下への夢 - 青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／「芝村義邦コレクション」（田原市博物館 2004 ネット検索）（加治）

柴山正範（しばやま・まさのり）

大分県師範学校を会場に版画講習会（1931.8・3～7 講師：平塚運一）が開催され、それを契機にして武藤一が発行した版画誌『彫りと摺り』の第8号（1933.6）に《貸しボート》を発表。1933年にも同会場、同講師により第2回版画講習会（1933.8.1～5）が開催され、『彫りと摺り』は『九州版画』と改題される。その第14号（1937.4）に《別府の山々》、第15号（1937.7）に《大手門（大分城）》、第16号（1937.10）に《奉天忠霊塔》、第17号（1938.5）に《睡蓮》、第18号（1938.11）に《青島風景》を発表。当時、柴山は大分県内の教員として勤務していたと考えられる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

柴山義雄（しばやま・よしお）

戦前、大阪府吹田市に在住で、詩人として第一詩集『星を喰べる法』（大阪 戴冠詩房 1927）や相原一馬・梶川政一との共著詩集『風と喇叭』（刊年不明）の刊行があり、また日月書院（大阪府吹田市）を経営し、ストリンドベリ随想・箴言集『青書』（宮原晃一郎訳 1943『青巻』は同一書物）を出版するなど出版人としても活動する。戦後は、版画図版入の〔第二詩集〕『詩と版画 暮れ残った街』（日月書院 1947）を刊行。また、此木山三訳・著『あらびあんないと』（1946）などの日月童話文庫シリーズや近藤精男編『三年生の児童が制作した童話集』（1957）の童話集などに挿絵を多数描いて出版するほか、柴山義雄編『一年生の童話読本』『二年生の童話読本』（いずれも須磨書房 1948）などの著作を持つ。版画の制作は、〔私家版〕『柴山義雄創作版画集』（刊年不明 1945頃か）と詩・版画・随筆の個人雑誌『祭日』1号・2号（1946.5・1946.8〔9号が1959.8に出版されているが、未確認〕発行はいずれも日月書院）を刊行。神戸在住の中国木版画家・李平凡とも交遊があり、未確認だが、戦前より版画の制作にかかわっていたと推測する。【文献】『柴山義雄刊行図書』『祭日』創刊号裏表紙（1946.5）／『版画堂目録』51（2002.6）（樋口）

澁江終吉（しぶえ・しゅうきち）1889～1933

1889（明治22）年に静岡市で生まれる。医師で考証家・書誌学者の澁江抽斎は祖父。京都で絵画を本多錦吉郎や

津田青楓に学び、東京で図案家として活躍。1926年に発足した新興工芸運動の代表的なグループ「无型」（高村豊周・藤井達吉・広川松五郎など）の創立会員である。第6回まで行われた无型展に刺繍の屏風や染物を出品しており、刺繍の名手として知られるようになった。若い頃には歌を詠み、文章を得意としていたこともあって、グループの同人誌『无型』第6号（1928.3）に「亜欧堂の版画」、第7号（1928.4）に「版画家北壽」を寄稿しているほか、『アトリエ』第6巻第8号（1929.8）の「織工弥左衛門の話」をはじめ、『中央美術』復興第4号（1933.11）には東西の染織史の研究として『美術織物の話』の連載を行っている。『名物裂の研究』（工政会出版 1933）を上梓。当時、東京市外滝ノ川西ヶ原に在住。二十歳代から固執喘息を患い、『无型』第4号（1928.1）の消息欄にも身体を悪くして今だ一進一退で全快せず、忘年会にも新年会にも顔が見えないことは淋しいと書かれている。1933（昭和8）年9月28日逝去。『アトリエ』第10巻11号（1933.11）では「逝ける澁江終吉氏の追想」として、高村豊周・香取秀真などの追悼文を掲載した。

版画関係では神戸・版画の家が発行した『HANGA』第3号（1924.9）に《無題（図案）》、第9・10合併号（1926.7）に表紙絵《牡丹》を発表。このほか、旧无型同人と教え子の集りである朱華染色刺繍研究会によって開催された遺作展（新宿・三越百貨店 1934.12.13～17）には刺繍作品や図案、絵葉書図案と共に版画作品も出陳されていることから、未確認ではあるが一時流行した版画模様屏風や版画作品も数多く制作していたものと思われる。【文献】窪丁吉「澁江終吉遺作並に朱華展を見る」『美之国』10-2（1934.2）／『モダニズムの工芸家たち』展図録（東京国立近代美術館 1983.10）／『創作版画誌の系譜』（加治）

渋川駿二（しぶかわ・しゅんじ）

1927（昭和2）年の第6回国画創作協会展第二部に油彩画《柘榴》が初入選。翌年の第7回展にも油彩画《落合風景》《山茶花とリンゴ》が入選した。同年（1928）7月の国画創作協会解散後は国画会に出品。1929年の第4回展から1944年の第19回展に連続して出品し、1935年の第10回展で国画奨学賞、1936・40・42年の第11・15・17回展で褒状を受賞。1943年に会友に推挙されている。またこの間、1930年の第2回聖徳太子奉賛美術展、1939年の第3回新文展、1940年の紀元2600年奉祝美術展、1942・43年の第5・6回新文展にも油彩画を出品した。版画は1931年の国画会第6回展に油彩画と共に出品した《秋晴》《静浦三津風景》の2点がある。【文献】「国画会展覧会略史」『第80回記念国展図録』（2006）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

渋谷於寒（しぶや・おさむ）→渋谷 修（しぶや・おさむ）

渋谷 修（しぶや・おさむ）1900～1963（1965）

1900（明治33）年石川県能登に生まれる。父同士が同郷とされる木下秀一郎（未来派美術協会を第2回展より主導）の父の病院で書生をしていたといわれる。1921（大正10）年10月、第2回未来派美術展覧会（未来派美術協会第2回展）に《唄へる》《愛の分裂》を出品し、未来派賞を受賞する。これ以後大正期新興美術運動の作家として活動した。1922年9月末に未来派美術協会の会員に推挙されたが、その後10月開催の同協会の第3回展と

なる三科インデペンデント展には「会友」として《ある夜の自像》《女》《青春時代》を出品した。一方、新興美術運動と並行して、この頃より日本藏票会に参加して蔵書票を制作する。1923年2月に中央美術社より発行のダヴィット・ブルリユークと木下秀一郎との共著『未来派とは？答へる』の表紙デザインを行い（木下秀一郎のスクラップブックにあるエスキースより推定）、同年5月開催の同著の出版記念会にも出席した。この年4月開催の未来派美術協会習作展に出品する。1924年マヴォの運動に参加し、機関誌『マヴォ』第1号から3号まで作品図版や文章を寄せた。同年10月に木下秀一郎が提唱して創立した三科の創立会員となる。同年11月、第1回首都美術展覧会に《変質者のカルケチュア》など3点を出品する。1925年5月、三科会員作品展覧会に《名づけがたきコンストラクション》など6点を出品し、同月末開催の「劇場の三科」では「丁度今が彼女の時だ」と題する一幕劇を演出した。同年9月、三科第2回展に《作品A》《作品B》を出品する。三科解散後はしばらく関西で暮らしたらしく、同年11月には大阪で「渋谷修近作個展」を開催している。その時期雑誌『柳屋』と組んで蔵書票や祝儀袋などを木版画で制作した。その後峰岸義一らと主情派美術協会を結成、1928（昭和3）年9月開催の第1回展、翌1929年5月の第2回展に出品した。その第2回展には「渋谷於寒」の名で出品。その頃に新興浪漫派の運動に参加した。また雑誌『グロテスク』にしばしば文と挿絵を寄稿する一方、「主情派現代風俗版画集」や「裸女四十四態頒布会」などを企画して広告を掲載した。1930年、峰岸や玉村らと巴里東京新興美術同盟展開催の母体となった第三形同盟を結成した。戦後の活動は不明。1963（昭和38）年逝去とされるが、1965（昭和40）年逝去とする文献もある。【文献】『大正期新興美術資料集成』（国書刊行会 2006）／市道和豊『渋谷修アヴァンギャルドから消された男』（室町書房 2011）（滝沢）

島 静夫（しま・しずお）

1922（大正11）年の第4回日本創作版画協会展に《月の夜》を出品。出品時は大阪に住む。【文献】『版画』1-3／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）（三木）

島 成園（しま・せいえん）1892～1970

1892（明治25）年2月13日大阪府堺市宿院町に生まれる。本名は成栄、号成園。美人画を得意とする。父は堺で道具屋を営む栄吉（文好）、母千賀は堺・乳守廓の大茶屋成田屋の娘。兄の一翠（号御風）は画家で浅田一舟門下。父や兄の画作を見て絵を独習。北野恒富・野田九浦らに師事し、大阪絵画春秋会のメンバーとして小野小町を描き出品。文展には1912（大正元）年の第6回展からで、《宗右衛門町の夕》を出品、翌7回展にも《祭のよそおい》で共に褒状。第9回展に《稽古をのひま》、第11回展に《唄なかば》を出品した。1915（大正4）年第1回大阪美術展に出品。1918年1月に北野恒富・水田竹圃らと「大阪茶話会」結成に参加。京都の上村松園、東京の池田蕉園、とらび「閨秀美人画家の三園」と称される。明治末から昭和にかけて、大阪市南区の、鍛冶屋町27、或は清水町綿屋町角に居住していたこともあった。1920年12月に銀行員と結婚。上海、小樽、大連、横浜、松本と夫の転勤に同行。一時期画業を中断。戦後は画業に専念し、年1回の高島屋での個展開催が恒例化していた。婦人雑

誌やグラフ誌などでの挿絵・口絵での活動も盛んであった。門下に秋田成香・伊東成錦・阪野成蝶・岡本成薫など。木版では、1922年1月《新錦絵帖・処女の頃》(木版12葉・柳原白蓮の和歌12首所載・大鏡閣：彫西上柳水・摺久保田保)、『大近松全集』附録木版《夕霧阿波鳴門》の夕霧》(木谷蓬吟刊1923)、1923年から1924年にかけて刊行された『新浮世絵美人合』(同刊行会・全17枚の内)の《七月 ゆあがり》、1931年の《舞妓》が知られる。1970(昭和45)年3月5日兵庫県宝塚で逝去。享年78。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) / 『おんなえ 近代日本美人版画全集』(阿部出版 2000)(岩切)

島 美智緒(しま・みちお)

1931年の夏、武藤完一は大分県師範学校において、版画教育講習会(8月3～7日 講師：平塚運一)を開催する。これを機に武藤は版画誌『彫りと摺り』を創刊する。島は大分県中津市からこの講習会に参加し、その第1号(1931.9)に《エキスリブリス》、第2号(1931.11)に《人形と煙管》、第3号(1932.1)賀状号に《迎春》、第6号(1932.12)に《山の温泉場》を発表する。一方、中津市からこの講習会に参加した同宿の者10人は親睦と版画技術向上のために、地元へ帰り、版画同人誌『空巢』を発行。島はその編集を担う。『空巢』という奇妙なタイトルは、講習会のために泊まった部屋が学生のための下宿であり、夏休みで空き巣だったことからの命名である。その第1号(1931)に《由布山》、第2号(1931.12)に《笛》、第3号(1932.9)に《エキスリブリス》《曼珠沙華》、第4号(1932)師走版に《風》を発表。『空巢』は4号で休刊。その後、1934年にも島は武田由平らと再び中津で版画と文芸の同人誌『鳩笛』を創刊する。都会的な洒落た表紙の版画誌であったが、2輯で休刊。その第1輯(1934.1)に《笛》《人形と煙管》《川口》、第2輯(1934.4)に《無題》《エキスリブリス 2題》《玩具》を発表。《人形と煙管》については「一寸古い趣味の感じを出さうと彫ってみました。」とコメントを寄せている。その間、東京の料治熊太が主宰した『版芸術』第9・21号(1932～33)に賀状を発表している。当時、中津市北部小学校に勤務。版画誌発表には通夫・美智雄・みち緒も使用している。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

島崎柳塙(しまざき・りゅうう) 1865～1937

1865(慶応元)年5月4日(明治元年2月4日説もある)、江戸牛込に生まれる。父は儒者・島崎醉山。柳塙の通称は友輔、字は子文。柳塙の号の他に墨水漁史、栩栩亭などの号もある。日本美術院に参加せずに旧派の道を進んだ。修業期には、洋画を桜井久(謙吉)、南画を竹本石亭に学び、さらに菊池容斎派の松本楓湖・川端玉章等の諸家に師事して人物・花鳥・山水を学び風俗画に新機軸を出した。1885年から1892年頃まで大蔵省印刷局での紋様図案・製版・印刷の仕事に従事。その間の1888年以来、東京府工芸共進会・日本青年絵画会・日本美術協会・内国勲業博覧会などで活躍し賞を受賞。1894年からは日本絵画共進会審査委員となる。1896年「日本絵画協会結成」に参加。また1896年から1898年には三井呉服店からの依頼を受けて染織図案を手がけたこともあった。1900年には福井江亭・結城素明・平福百穂らと自然主義を掲げた「无声会」を結成。日本美術協会・日本画会などの委員になった。1907年の勲業博覧会では《美音》が二等賞

牌、同年の文展第1回展に《西鶴のおなつ》、翌年の第2回展に《おないどし》で、連続の二等賞牌を得、その後も入賞し、旧派の正派同志会評議員として重きを成した。1910年からは川端画学校の教授となった。版画での木版多色摺口絵は、多くはないが、『文芸倶楽部』第18巻第3号(1912)の《文鳥》、第19巻第7号(1913)の《まつ風》などの美人画が知られ、単行本での巻頭木版口絵もある。他に新聞・雑誌での挿絵も描いている。1921年の木版画集『義士大観』(義士会出版部)に《仙石邸の審問》を担当している。府下下日暮里に住居があったこともあった。1937(昭和12)年1月21日、東京市荒川区で逝去。享年71。【文献】『文学美術人名辞書』昭和16年第8版(立川文明堂 1932年初版) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)(岩切)

島田 要(しまだ・かなめ) 1895～没年不詳

1895(明治28)年香川県丸亀に生まれる。美術教育に従事し、1931年頃は大阪の桜宮小学校に教員として勤務していた。1929年の第9回日本創作版画協会展に木版画《新大阪風景》《菓子のある風景》が初入選。これに続く1931年の日本版画協会の第1回展には、会友として《ルンペン》《風連鍾乳洞》を出品した。1932年会員に推挙され、同年の第2回に《諍ひ》、1933年の第3回に旧作の《窓際の静物》(リノリュウム版)と新作の《ダリヤ1》《ダリヤ2》《諍ひ》《舞踏(未完成)》、1935年の第4回に《金魚鉢》《木津川貯木場》など7点、1936年の第5回展に《秋果》《めざし》《松竹梅》《皮の手袋》を連続して出品。また、1934年の「日本現代版画とその源流展」(パリ)、1936年の「日本の古版画と日本現代版画展」(ジュネーブ・マドリッド)、「現代版画展」(サンフランシスコなど欧米9都市巡回)にも出品した。その後、中断もあるが1943年の第12回展にも《熱帯魚(赤蝶々魚)》など5点を出品している。一方、1931年には前田藤四郎や大阪・堺の教員仲間と創作版画グループ「羊土社」を結成。版画誌『羊土』を創刊し、第1集(1931.6)に表紙絵(木版)と木版画《ルンペン》、第2集(1932.12)に表紙絵(木版)と《無題》《レットフ》トハンド》を発表。1936年には羊土社版画展(45～21 大阪・金子彩陽堂)を開いている。また、他の版画誌への参加もあり、『版芸術』第9号(1932.12)と第21号(1933.12)に木版年賀状、《陸奥駒》16集(1934.12)に木版年賀状、第17号(1935.4)に《おじやみ》を寄せている。1943年に結成された「日本版画奉公会」にも参加。会員名簿の住所は大阪府堺市甲斐町東丁3である。【文献】『於巴里日本現代版画展準備展覧会並第三回展作品目録』(1933) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『エッチング』123 / 『創作版画誌の系譜』(三木)

島田 忠(しまだ・ただし)

1933年の夏、武藤完一は大分県師範学校において、第2回版画講習会(8月1～5日 講師：平塚運一)を開催する。これを機に、主宰する版画誌『彫りと摺り』(1931～1933)を『九州版画』(1933～1941)と改題。その第1号(1933.9)は講習会記念号であり、島田の木版画《読書》も掲載されていることから、この版画講習会に参加したものと考えられる。後日、平塚は講習会の思い出と共に作品の感想を武藤に送る。島田の作品については「斯う云ふのも一つの行き方で、中々よく刃物がはまっている

のはよろしい。」と評している。【文献】『九州版画』1／『創作版画誌の系譜』（加治）

島田墨仙（しまだ・ぼくせん）1867～1943

1867（慶応3）年10月9日越前福井藩の絵師・島田雪谷の次男として生まれる。本名豊作、後に豊と改める。兄は日本画家雪湖。9歳の頃より父に就いて四条派を学び、29歳の時に上京して橋本雅邦に師事する。幕末勤王の志士や先哲聖賢など歴史人物画を多く描いて文展や帝展で活躍する。1942年の第5回新文展出品作《山鹿素行先生》で帝国芸術院賞を受賞。1943（昭和18）年7月9日東京で逝去した。版画は赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部 1921）に《義徒と細井廣澤》1図を制作。【文献】『山田書店新収美術目録』81（2008春）／『福井の宝 島田墨仙展』目録（福井県立美術館 2011）（樋口）

島田正允（しまだ・まさもと）

静岡の版画仲間が発行した版画同人誌『ゆうかり』第29号（1935.7）の「ゆうかり同人録」には名前があがっているものの作品は発表されていない。当時静岡県清水市辻町に在住。【文献】『ゆうかり』29（加治）

島田芳雄（しまだ・よしお）

東京において古仁所卓編集発行の版画誌『爆竹』は、第4～7号（1929～1930）が確認されている。第4号（1929.10）掲載の「第3号を見て」によると島田は第3号（1929）に《神戸風景》を発表しており、それについて執筆者の田中比左良は「版画的面白味をよく出している。良い。コンポジションも良い。電線の太いのも面白い」と評を寄せている。第4号（1929.10）に《大川端風景》《フレンド女学校裏》、第5号（1930.1）に《麻耶子の像》、第7号（1930.5）に《夕暮れの別府港》を発表する。『爆竹』は創刊号から3号が未確認であるため、発刊の経緯は不明であるが、次第にプロレタリア美術の傾向を強めていく。その中で島田はプロレタリアを意識しない静かな版画を制作していて、《夕暮れの別府港》の感想として「昨年の修学旅行の印象です。」と書いている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

嶋津国夫（しまづ・くにお）

山梨県甲府で秋山喜久三・杉原董三・竹村節之助の3人が発行した版画と文芸の同人誌『線 SEN』（1928-1931）の第1巻2号（1928.10）に《別れ》《書齋》《ポーズ》と詩「夏・即吟」を発表。ただし《ポーズ》は目次に記載されているが版画の貼付はない。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

島戸 繁（しまと・しげる）1902～1998

1902（明治35）年岐阜県に生まれる。その後、彦根に移り住み、県立彦根高等女学校教諭、官立彦根工業専門学校助教授、滋賀県立短期大学教授として美術を教える傍ら、生涯彦根の漁港風景を描き続けた。1961（昭和36）年に静岡女子短期大学（現・静岡県立大学）教授となり、約7年間静岡に住居をおいた。退職後は名誉教授に迎えられるが、暖かく明るい静岡から敢えて、寒いけれども愛する彦根に帰り晩年を過ごす。1977年、彦根市功労者（文化部門）として表彰を受ける。1998（平成10）年3月14日逝去。

版画制作については、滋賀県立今津中学校（現・滋賀

県立高島高等学校）に勤務していた1930年当時、九州地方で最初に発行された版画誌『木版』の第1号（1928.3）に《浴する女等》、第2号（1929.12）に《ガード》、第3号（1930.4）に《椿》を発表。《椿》の作者言では「椿の葉の堅剛な感じ、ペルシャ壺の鈍重な光、テーブルクロスの静寂な落着き、恁う言った感じは意余って腕これに伴はざるものがある」と記している。この『木版』は大分県師範学校の武藤完一が発行したもので、九州・四国・京都などの中学校や師範学校の教師が作品を発表している。【文献】滋賀大学築城400年祭《談話室》「それぞれの彦根物語」第24回（2006）（インターネット検索）／『創作版画誌の系譜』（加治）

清水 馨（しみず・かおる）

1940（昭和15）年の造型版画協会第4回展に《追憶の断片》3点を出品。【文献】『造型版画協会第四回展目録』（三木）

清水孝一（しみず・こういち）1895～

1895（明治28）年12月11日東京市日本橋区駿河町に生まれる。版画は永瀬義郎に学び、1927年の第7回日本創作版画協会展に《風景》3点が初入選。翌1928年の第8回展にも《富岳》《晴日》《草（ママ）春》が入選。会員に推挙され、1929年第9回展に《磯子風景》《南国小景》を出品している。この頃の清水について永瀬義郎は、谷中安規を紹介する文（「押入物語（3）」『アトリエ』1928年8月号）の中で、「清水君は自転車屋さんで尺八の先生で、ようかん造りの名人で、浅草でようかん屋をした事もあり、そして油絵を描くと云ふ話だけでは変わつた人間だが、人間は至つて常識家で何もかも知り抜いた所謂苦勞人で一花柳の巷は余り知らないらしいが一人の世話好きで、つまり好人物の見本見たいな人柄なのである、ふとした機会に清水君を識つてから僕が師匠格になつて清水君は木版画を研究し出した。所で今まで描いていた油絵は余り見所がないのだが、版画は清水君の性に合ったものと見えてづんづん眼に見えて進歩した。版画を始めてから未だ二年足らずに係はらず、今日では押しも押されぬせぬ版画家で日本創作版画協会の会員に推薦されるし、作品は春陽会、槐樹社、太平洋に出品して注目をひけると云ふ訳で、目下自転車屋も、尺八の先生も、ようかんやも皆止めて終つて版画専門に精進してゐる。もう一つ愉快な事は、清水君絵では飯が食はれないと悟つて、生活の為に額縁を作つてゐる事だ」と紹介しているが、日本版画社から出された『日本現代創作版画大集』（1927～1928）の摺りも担当している。文中にある春陽会展には、1927年の第5回展に《石橋のある風景》《大森小景》、1928年の第6回展に《市ヶ谷小景》など4点、1929年の第7回展に《競馬場の図》が入選。また、1928年には第9回帝展に《橋のある風景》が初入選。永瀬義郎は「今年度帝展の版画のピカールであらう。全体の構図に寸分のすぎがないし、橋の上に見える建物など一々変化があつたり、丸刀のタッチまでうまく樹木のマツスを出してゐる所など一寸真似の出来ない仕事だ」と評している。その後も1929年の第10回展に《山国城景の図》、1930年の第11回展に《起重機のある風景》、1931年の第12回展に《坂道のある風景》、1932年の第13回展に《或る街の風景》が連続して入選した。1931年の日本版画協会結成には、会員として参加。第1回展に《噴火口跡》《灯台》《風景》、1932年の第2回展に《風景》《山の湖水》、1933年

の第3回展に《花火》と《風景》2点、1935年の第4回展に《風景》《橋》《富士》《門》を出品。また、1934年の「日本現代版画とその源流展」(パリ)、1936年の「現代版画展(サンフランシスコなど欧米9都市巡回)」にも出品した。1938年の第7回展には、「新日本百景第一期作品五十景のうち」に《外房大海》を出品したが、この作品は1939年4月に日本版画協会から配布されている。なお、旺文社展にも出品し、1936年の第4回展で社友に推挙されているが、同会での活動の詳細は不明である。【文献】『アトリエ』4・5・5・8・5・11 / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『エッチング』123 (三木)

清水秋江(しみず・しゅうこう)

1930年代の静岡では『かけた壺』(1931~1935)、『ゆうかり』(1930~1934)といった版画誌が発行されるが、同時期に個性豊かな版画誌『版画座』(1932~1934)が発行された。その第2号(1932.12)に《静物》《影芝居》、第3号(1933.1)に《田町附近》《画状》、第2年2号(1933.2)に《煙突1》、第2年5号(1933.5)に《城内風景》と表紙絵、第2年6号(1933.6)に《朝顔の芽》《風景》、第2年7号(1933.7)に《オカンギャケ》を発表。第2年2号(1933.2)の《煙突1》について「この煙突百景を完成してみたいのです。工場の煙突、湯屋の、長屋のと煙突はつきない。」と抱負を述べているが、煙突の作品群は確認できていない。当時、清水市二番町清水鼎方に在住。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

清水澄夫(しみず・すみお) 1919~

1919(大正8)年5月9日、長野県北安曇郡大町(現・大町市)に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第1号(皇紀2598年版)(1938)に《読書》を発表する。同校を1939年に卒業。以後、1950年当時は松本市田町小学校に教員として勤務、1964年には木曾郡開田西小学校の教頭、1967年に東筑摩郡会田小学校の校長となり、松本市今井小学校校長を最後に1977年退職する。その後、松本筑摩高等学校美術講師などを勤める。日本美術教育学会会員。信州美術会会員。日本水彩画会展、白日会展出品。著書に『子供の絵の見方導き方』(電算出版企画 1982)がある。1982年には長野県松本市女鳥羽に在住。【文献】『子供の絵の見方導き方』(電算出版企画 1982) / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

清水武次郎(しみず・たけじろう) 1915~1993

1915(大正4)年和歌山に生まれる。和歌山県師範学校に学んだ。1930(昭和5)年に清水が赴任した小学校では「綴り方(作文)」の指導が熱心に行われており、先生たちが謄写版で子どもたちの文集を手作りしていた。学生の頃から絵を描いていた清水は、絵画の製版を得意としていた先輩教員の奥山勇の影響を受け、自分の手で美しい印刷物が作れる謄写版の面白さに魅了されていった。この版でより創造的な仕事をしたいと考えるようになった清水は、小泉興吉の励ましをうけて独学で謄写版の技術を学び、教職のかたわらカット集の制作を始めた。そして、終戦の年、1945年に奥山と謄写印刷所「蝸牛工房」を開くことを決め、翌年5月には、さっそく『創作かつと図案集』を発行した。謄写版による雑誌『とうしゃ文化』

の創刊もこの年であった。『とうしゃ文化』は全国の謄写版技術者に送られ、反響を得た。なかでも、清水の独特な作風に注目した孔版画家・若山八十氏からは、自らの絵で、自ら版を作り、自ら刷る「創作版画」としての謄写版を勧められ、本格的に版画の制作に進むきっかけになった。

清水が謄写版を始めた頃、版の技術は洗練され、精密な絵画の再現まで可能になっていたが、版画を制作していたのは若山や板祐生をはじめとする限られた作家だった。清水は謄写版だけに可能な表現に魅力を感じ、試作を『とうしゃ文化』で発表し、1947(昭和22)年から、全国の版画家たちが集まる日本版画協会展への出品を始めた。ほかにも国画会展、関西の美術を刷新することを目標に創立された汎美術家協会展にも出品するようになった。

1967年に展覧会への出品をやめたあとも、清水の制作は昼間の謄写印刷所の仕事が終わった後に続けられた。そして1971年に和歌山市の小松原画廊で初めての個展を開き、以来、個展をおもな作品発表の場とした。ロウ原紙ばかりでなく、新しく開発された和紙をもとにした孔版原紙をはじめ、さまざまな素材と技法による孔版によって独自の表現を追求し、1978年に若山らの「点の会 日本和紙孔版作家展」の創立に参加したときには、見る人を驚かせる自在な作風に到達していた。機械化されない、手仕事による謄写版、和紙による孔版に愛着を持ちながら、その枠のなかにおさまらない大らかな表現は、抑えられない創造の喜びがそのまま表れたかのようである。

1980年、和歌山の若い版画家らと「和歌山版画80年の会」を結成、1993(平成8)年逝去するまで出品を続けた。【文献】清水武次郎「カット談義」『孔版界』4(孔版社 1947.11) / 若山八十氏「孔版画の進出」『孔版』56(日本孔版研究所 1949.6) / 若山八十氏「清水武次郎さんの消息」『孔版』62(日本孔版研究所 1949.12) / 「清水武次郎回顧展リーフレット」(ギャラリー・ビュッフェファイブ 1984.11) / 『アートニュース』18(白石画材サービスルーム 1979.3) / 「孔版画一筋に生きる 清水武次郎」『アートニュース』21(白石画材サービスルーム 1984.1) / 「清水武次郎の孔版画 Mimeograph」33-41頁、清水武次郎「孔版画ひと筋」42-43頁、浜田邦男「人間清水武次郎」44-45頁、『季刊 版画館』18(川合書房 1987.4) / 「終わりのないものを一白石寛の仕事」(ギャラリー白石 1994.10) / 赤山俊治「和師展を見る」『五月会報』11 / 『とうしゃ文化』1~19(和歌山謄写美術協会 1946.7~1948.4) / 『日本版画協会目録』 / 『国画会目録』(植野)

清水禎三(しみず・ていぞう)

九州大分の武藤完一は大分県師範学校において第2回版画講習会(1933.8.1~5 講師:平塚運一)を開催し、それを機に版画誌『彫りと摺り』(1931~1933)を『九州版画』(1933~1941)と改題する。その第12号(1936.12)に《海岸風景》、第13号(1937.1)に《燕》を発表。1941年当時、大分県北海部郡白杵校に勤務。【文献】『九州版画』誌会員(『九州版画』24 1941.12) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

清水利治(しみず・としはる)

富山県に生まれる。1927(昭和2)年東京美術学校彫刻科木彫部に入学。彫刻を学ぶ傍ら、校友会版画部に参加。

1928年2月に校内で開かれた「椎ノ樹第1回創作版画展」に木版画《風景》《村》《夜景》、6月の第3回展に《顔》《黄ろい花》《赤坂風景》を出品。1932年同校を卒業。同年の第13回帝展に彫刻《スキヤー》、1940年の紀元2600年奉祝展にも彫刻《伝統》が入選している。その後の活動は不明であるが、1970年頃は富山市五福末広町に住む。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010）／『校友会月報』16-8・17-3（東京美術学校）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』（ぎょうせい 1997）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科』（同窓会名簿編集委員会 1972）（三木）

清水房雄（しみず・ふさお）

版木会発行の創作版画集『版』第2輯（1937.2）特集「竹に寒雀」に2点の木版画を発表。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。なお、『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認であり、目次等に作者名はあるが、作品名は記載されていない。【文献】『版』2（加治）

清水正博（しみず・まさひろ） 1914～2011

1914（大正3）年、東京下谷（現・台東区）に生まれる。清水の自記記録（メモ）によれば、1932（昭和7）年12月に小野忠重に誘われて、その年4月結成の「新版画集団」に参加したという。その後集団の第2回展（1933.3）に《都市風景A》《都市風景B》など6点を出品し、その後も第3回展（1933.11）に6点、第4回展（1934.6）に6点、第5回展（1935.10）に1点、第6回展（1936.10・最終回展）に6点と、逐次開催の正規の展覧会に毎回出品した。それ以外にも、集団主催の「第1回アンデパンダン展」（1934.6）や「江戸東京風景版画展」（1934.7）、「エノケンとその一座を廻る版画展」（1934.9）などのテーマ展、集団小品展（1934.4、1935.5）にも出品した。また集団発行の機関誌『新版画』の第7号（1933.1）から第18号（1935.12・最終号）まで毎回自作の木版画を掲載した。そのうち第10号と第16号の表紙を担当し、木版画で飾った。「新版画集団」解散（1936.12）後は、1937年3月に版画の絵画的造形の確保を標榜して小野忠重や柴秀夫ら5人で「造型版画協会」を結成し、第1回展（1937.6）に《花々》《出発》の2点を出品、その後もアジア・太平洋戦争をまたいで開催された同協会展に毎回出品した（1954年開催の第12回展まで）。またこれら小野忠重を中心としたグループの展覧会以外に、1935年開催の日本版画協会第4回展と翌1936年開催の同協会第5回展、1936年開催の国会画第11回展にも出品した。1943年6月か7月頃、その年5月結成の「日本版画奉公会」の会員となる。同年末頃から1944年初めに応召し、負傷もしくは病気のため1944年末頃（推定）復員する。戦後は旺文会版画部の委員としても活動したとされる。2011（平成23）年10月26日逝去。【文献】『創作版画誌の系譜』／加治幸子編著『新版画集団展目録』（『版ニュース』第4号別冊 輝開 1998）／『誕生100年 小野忠重展図録』（町田市立国際版画美術館 2009）（滝沢）

清水三重三（しみず・みえぞう） 1893～1962

1893（明治26）年10月8日三重県四日市市に生まれる。本名「佐藤三重三」。1919（大正8）年東京美術学校彫刻科選科を卒業。卒業後に日本橋の清水家に婿入り養子となり「清水」姓となる。挿絵画家・彫刻家であることを生涯貫く。在学中から挿絵を描き（1916年3月『新演芸』）、卒業の1919年3月には自ら装幀・挿絵（木版画）・編集をした『朝寝髪』を春陽堂から出版。震災で絶版になり、好評の爲、新たに絵を描き替えて1927年7月15日に同じく『朝寝髪』のタイトルで（木版の彫・大倉九節、摺・田口陽康）春陽堂から出版。美校では木彫を主に学び、1927年から1932年には、「構造社」に参加。その後は美校同窓の木彫の会「木芽会」、「第三部会」に彫刻作品を出品。木版では、大正末に木版墨版に手彩色の「芝居スケッチ肉筆着色版画の会」を自ら代々木初台の自宅に興し、1926年1月下旬に《鏡獅子（五代目中村福助の女小姓弥生）》（二回配布）、《吉右衛門・梅の由兵衛》（三回配布）などを刊行（5回5枚企画の中、2枚は確認したが、全部出たのか未確認）。1928年「主情派美術会」に参加し、「主情派現代風俗版画集」木版画《長襦袢芸者雨を聴くの図》制作。1940年の《寿門松お菊》（大判錦絵・限定300部）などがあるが全貌は不明である。1958年、自著画『小唄絵本 鬢のほつれ』刊行。1962（昭和37）年10月29日東京都渋谷区で逝去。享年69。【文献】『構造社展 昭和初期彫刻の鬼才たち』展図録（宇都宮美術館 2005）（岩切）

清水 豊（しみず・ゆたか）

長野県北佐久郡小諸町（現・小諸市）に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第1号（皇紀2598年版）（1938）に《夏の山》を発表。同校を1940年に卒業。1950年当時は北佐久郡小諸中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

清水良雄（しみず・よしお） 1891～1954

1891（明治24）年8月4日兵庫県に生まれる。1911年東京美術学校予備科西洋画科志望に入学。1916年に同校を卒業し、研究生となっている。公募展への出品は、在学中の1912年に開かれた第1回光風会展に油彩画《寺院の秋》《ひなげし》が入選。以後、第2・3・5～7・15・17～30回展（1913・14・1917～1919・1928・1930～1943）に出品し、その間の1927年に新会員になっている。また、文展にも1913年の第7回展に《調べの糸》が初入選し、以後連続して出品。1917年の第11回展、1918年の第12回展、1919年の第1回帝展、1922年第4回帝展で特選を受賞している。1924年には帝展無鑑査となり、1927年の第8回帝展では審査員を務めるなど、官展系の作家として活躍した。一方、童画家としても知られ、1918年7月に鈴木三重吉が創刊した童話雑誌『赤い鳥』（1918.7～1936.8 全196冊）の挿絵を創刊号から表紙絵・口絵（163冊）を担当。1927年には武井武雄らと「日本童画家協会」を設立している。版画については、東京美術学校の時代に結城林蔵と伊東亮次のエッチング実技の実習を受けているが、1932年には洋風版画会の会員となり、同年の第3回展に《たんぼ》、《小鳥》を出品している。戦時中に広島県芦品郡へ疎開。戦後は、1946年の第1回日展に油彩画を出品したのを皮切りに、第4・6・8回展（1948・50・52）にも出品。また、光風会展へは1948年の第34回展、1952・53年の第38・39回展に出品している。

また、1950年には広島大学講師となっている。1954（昭和29）年1月29日広島で逝去。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』（ぎょうせい 1992）／『文展・帝展・新文展・日展 全出品目録大正期美術展覧会出品目録 明治四十年一昭和三十二年』（1990）／『第85回記念光風会目録集』（1999）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／草光信成『回顧』『エッチング』42／『東京朝日新聞』（1932.5.10）／『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社 1998）（三木）

志村量美（しむら・かずよし）1905～1988

1905（明治38）年4月27日、山梨県豊富村（現・中央市）大鳥居3204番地、農業志村名登利の長男に生まれる。山梨県師範学校（現・山梨大学教育学部）を卒業。中巨摩郡（現・甲西町）大明小学校をはじめとして、教員生活を戦前から戦後まで37年間続け、豊富小学校校長で退任する。在職中から絵画、詩歌などの芸術教育を児童たちに教え、退職後は豊富村文化協会の初代会長となる。豊富村郷土研究会を組織し、郷土資料館設立に寄与するなど村の文化行政・美術振興に尽力し、山梨県教育功労者表彰、勲五等旭日双光章、村政功労者を受賞。1988（昭和63）年6月5日逝去。

版画制作については師範学校時代に技術を習得し、芸術教育の一環として子供たちに教えると共に、山梨美術協会展などへ版画を出品し、個展の開催も行った。料治熊太発行の『版芸術』第30号（1934.9）に志村量美詩画集「花を育てる」として詩と版画作品を発表。料治は同号のあとがきで志村のことを甲州の山峡の詩人で、今回の作品は典型的であるが、どこか瞑想的なところがあって、一茎の花の楽しさを描こうとする作画態度に好感が持てると紹介している。このほか、同じく料治が発行した『版画蔵票』第4号〔1938.2〕に蔵書票《山峡の村》自家用、第5号〔1938.3〕に《かはほね》吉田鴻崖氏用、第7号〔1938.5〕に《あんどん》堀田和義氏用を発表。1938年には山梨美術協会会員に推挙され、山梨造型美術展などに出品。生涯、版画の制作を続けた。著書には、1973年11月から朝日新聞に連載した新風土記「山菜とり」のカットを本にした版画集『山菜図譜』（志村量美 1975）、詩集『花曇る』（サンニチ印刷 1968）、『曾根丘陵地帯の豊富村郷土散歩』（豊富村教育委員会 1980）などがある。【文献】『版画家・志村量美』『豊富村誌』下巻（豊富村役場 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

志村立美（しむら・たつみ）1907～1980

1907（明治40）年2月17日群馬県高崎に生まれる。本名は仙太郎。神奈川高等工業学校図案科を中退して、模様師山川霽峰の徒弟となる。1924年に、その霽峰の息子で日本画家・挿絵家の山川秀峰に内弟子として入門。その後、鏑木清方一門の「郷土会」、あるいは師の山川秀峰・伊東深水主宰の「青靑会」に日本画を出品。印刷絵画では、鬚物、現代ものを問わず、世態風俗、美人風俗をてがけて昭和期の代表的挿絵画家である。1915年、18歳の時の『愛児の友』（掲載の「岩見重太郎」）を始め、『婦女界』、『主婦の友』などの婦人雑誌の口絵、挿絵での活躍がよく知られ、新聞挿絵では『毎夕新聞』連載の那枝完二「接吻市場」が最初というが、『東京日日新聞』、『読売新聞』などの新聞連載小説挿絵で活躍。特に1934年の林不忘「丹下左膳」、角田喜久雄「妖棋伝」、1938年の小島政二郎「人

の妻椿」などが知られる。戦後に、出版美術家連盟の会長。1976年の作品集『美人百態』で日本作家クラブ賞受賞。版画には、奥山儀八郎主宰「日本版画研究所」（版元金田信武・金田商店）から、木版画集『現代美人風俗五態』の《追羽根》《舞始め》《花吹雪》《丸髻》《夏たけて》を出版（昭和二十年代末から没年にかけて製作されたものと推定）。1980（昭和55）年5月4日東京都新宿区で逝去。享年73。「うるんだ瞳の麗人像」に多くのファンがいる。そのために、作者没後の復刻複製木版、肉筆画複製工芸版なども多い。【文献】『日本美術年鑑』昭和56年版（東京国立文化財研究所 1983）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

志村 浩（しむら・ひろし）

東京吉祥寺の「朴の会」は年賀状の交換から始まり、版画集『むさしの風景』の発行に至る。会の連絡先が志村方になっていることと「朴の会御通知」としてあとがきを書いていることから、志村が編集発行を行ったと思われる。出品者には当時東京吉祥寺近辺に住んでいた版画家の織田一磨をはじめ、日本画家の塩出英雄、児童文学作家の柴野民三など、絵画や文学など芸術関係者が多く含まれている。志村は創刊号にあたる其の1（1938.11）に《高井戸浴風園》を発表。なお、其の2まで発行されていることは写真で確認できているが、其の2の内容については不明。当時、東京市外吉祥寺2073に在住。【文献】『むさしの風景』1（加治）

下澤木鉢郎（しもざわ・きはちろう）1901～1986

1901（明治34）年1月30日、青森県弘前市和徳町に、下山竹二郎の次男として生まれる。本名は喜八郎。旧姓「下山」、後に「下澤」姓となる。高等小学校の在籍当時、長女ノブの嫁先である竹内家に通い義兄助七と交流を持つ。助七は竹童と号し、また助七の兄兼七も「無為舎」の俳号を持つ俳人兄弟で、結社「洪茶会」を結成していた。そこで、1915年に結成された自由律を主軸とした『層雲』弘前支部（その後、1918年「群青社」、1931年「鷹の会」へと改名）にも参加する。その一方、正当俳句の「十和田」（1931結成）にも参加していた。下澤の俳句への拘りは生涯一貫してあって、俳人としての美意識が、創作者として下澤の感性の礎となる。又、俳号であり、絵画作品の号でもある「木鉢郎」はこの俳句の世界から生まれた。

1916年には、画家を志し、兄祐三郎を頼って上京し、一時本屋に勤めるが、築地新富町で印刷所「浩文社」を経営していた兼七から中央美術社を紹介され入社する。中央美術社には、1921年に徴兵検査を受けるために帰郷するまでの2年間勤務する。在籍の期間、仕事の関係から石井柏亭・平塚運一らと知り合う。この出会いは、下澤の画家としての将来を決定する重要な出会いとなる。帰郷に先立ち1921年の第8回日本水彩画会展に《寒空》、第9回光風会展に《冬の鉄橋》を出品し入選する。これが下澤にとって最初の公的展覧会の出品となる。1923年の除隊の後、積極的に絵画制作に取り組み、翌1924年の第5回帝展に《堀割》（テンペラ画）が入選したほか、第11回日本水彩画会展に《雪霽》を出品し会員に推挙され、以後同展に出品を続ける。さらに同年の第6回日本創作版画協会展にも《焼跡風景》を出品し、下澤の版画作品の最初となる。そこには平塚運一が存在が強く反映する。1928年棟方志功を伴い代々木上原の平塚運一宅に行き、棟方志功を紹介する。以後棟方と平塚の交流が始まる。

1930年の第5回国画会にテンペラ画2点と木版画《トクダミ》を版画としては初出品し、以後国画会にテンペラ画とともに版画の出品を続ける。第6・8回展で、国画会奨学賞を受賞。同年の第7回日本創作版画協会展には《林檎畑の冬》を出品して会員に推挙される。さらに平塚運一の指導の下に「刀画房」（事務所は代々木上原の前田政雄宅に置く）が設立され、同年12月に版画同人誌『版』を創刊、同誌に下山は第8号（1929.7）まで作品を発表する。1931年、「日本創作版画協会」を改称し「日本版画協会」が設立され、第1回展から17回展まで会員として出品を続ける。1932年下澤文平の長女菊江と結婚し、その後「下澤」姓を名のる。1933年には郷里の弘前において、黒瀧俊雄・糸田恵造らと集い「鐮刀社」を設立し、同年2月に版画同人誌『版曹』を創刊、第3号（1934.1）まで刊行する。1934年には平塚運一宅に於て「日曜版画会」が開催され、畦地梅太郎・前田政雄らと共に参加する。この研究会参加者を中心に1941年末には平塚運一を代表者として「きつつき会」が結成され、翌1942年7月には「第1回きつつき会版画展」（第2回展は43年7月）が開催され、《浅間 焔原》《萬葉版画 醜の御楯》を出品する。同年8月には『17年版 きつつき版画集』（翌年には18年版〔第二輯〕を出版）が出版され、《雪景》を発表する。この「きつつき会」は創作版画運動内に於ける、平塚運一を主軸とした一つの流れを形成する。下澤もその重要な会員として席を置く。1942年に弘前市から東京府下北多摩群狛江村に転居。翌年には私家本『句と版画 狛江村』を出版する。更に同年、第18回国画会に《岩窓》を出品し、国画会版画部会員に推挙される。1952年に棟方志功が結成した「日本板画院」に北沢収治・笹島喜平・棟方未華・ワルワラ・ブノワらと参加し、第1回展に《あけびと葡萄》《東洋紡績浜松工場1・2》を出品。以後は日本板画院展、国画会展が主要な発表の場となる。1954年には日本板画院展ゴッホ賞を受賞する。同年に雪景を画題とする「雪の絵毛筆即写展」、翌年には「雪ばかりの版画展」を開催するなど、雪景を画題とした展覧会を2カ年にわたって開催する。1955年には関野準一郎との共著『版画の技法』を宝文館より出版する。本書の著者略歴で下澤は「板画家」と記載する。1957年第1回国際版画ビエンナーレに《唄う子》《お師匠さん》を出品する。1959年には句集『方尺の空』を出版。その後「本の会」を発足させ、私家本として『雪景色』（1960）・『越後路』（1961）・『みちのくの句』（未確認）の3冊を出版する。1961年には多年にわたる版画の普及活動が認められ「青森県褒賞」を、1966年には「国画会四十周年功労賞」を受賞する。1969年には『県政のあゆみ』の表紙絵を描く。そして翌年には、その表紙絵の12ヶ月分を『陸奥十二題』（12点1組）として頒布会を催す。1972年に青森県立図書館で「下澤木鉢郎版画回顧展」、1978年狛江市から千葉県流山市に転居。1979年には弘前市立博物館において「下澤木鉢郎作品展」を、1985年には「日本的抒情の版画家 下澤木鉢郎作品展」が開催される。1982年には、長年の版画制作と普及活動の功労で紺綬褒章を受章する。1986（昭和61）年6月8日、千葉県松戸市に於いて逝去。享年85歳。

下澤木鉢郎の版画は、地方風俗・風景を画題とし、輪郭線をはっきりと描き、落ち着いた色彩を駆使した情感の溢れる作品となっている。そこには若き日より俳諧の世界に身を置いていた、下澤ならではの美意識がはつきりと見て取れる。【文献】船水清著『版画家 下澤木鉢郎』（青森県芸文協会出版部 2000）／『下澤木鉢郎版画集』（北

方新社 2003）／『創作版画誌の系譜』（河野）

下澤文平（しもざわ・ぶんぺい） 1884～1974

1884（明治17）年、青森県北津軽郡板柳町大字田中町に生まれる。1904年青森県師範学校を卒業。青森や北海道で尋常小学校教師として勤務。1918年に北海道礼文郡深井尋常小学校の校長となり、尺忍尋常小学校の校長を経て、1934年に退職。弘前市茂木町に居を移すが、1938年に東京府北多摩郡狛江村に永住の居を構える。1974（昭和49）年12月25日逝去。版画関係は、下山木鉢郎と糸田恵造・黒滝俊雄の3人が弘前で創刊した版画誌『版曹』（1933～34）の第3輯（1934.1）に《利尻富士》を発表。なお版画家下山木鉢郎は文平の長女菊江と1932年に結婚し、1934年頃から下澤姓を名のる。【文献】下澤菊江『おちこち』（ふだん記全国グループ 1977）／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

下田 力（しもだ・ちから）

大分県大野郡では生野正義を中心に郡下小学校教員を主体にした大野版画協会が設立され、版画誌『大野版画』（1933～1934）を発行する。下田もその第1号（1933.12）に《野菜》、第2号（1934.2）賀状集に《犬》を発表しており、当時、郡内の教員として大分県大野郡に在住と考えられる。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

下村為山（しもむら・いざん） 1865～1949

1865（慶応元）年5月21日伊予国松山藩、現在の愛媛県松山市に生まれる。本名下村純孝。為山と号す。1885（明治18）年二神フジと結婚し二神姓となる（1895年離婚、以降は下村姓に戻る）。1883年上京、本多錦吉郎の彰技堂、その後小山正太郎の不同舎で洋画を学び、明治美術会展に出品。1890年第3回国勲業博覧会に《慈悲者之殺生之図》を出品して褒状を受ける。新鋭洋画家として注目されるが、1891年従兄の俳人内藤鳴雪を介して正岡子規を知り、「牛伴（ぎゅうはん）」と号して俳句制作にのめり込み、次第に洋画から離れ、新境地を求めて俳画家に転じる。東京・大阪・松山などを転々とし、市井の俳画人として、1949（昭和24）年7月10日疎開先の富山県で逝去した。版画の制作は、明治20年代に「二神純孝」名で、《団子坂菊花》（日本堂 刊年不明）、《ニコライ教会堂》《鹿鳴館》（いずれも日本堂 1890）などの石版画や『ホトトギス』の中心的挿絵画家として、俳誌『ホトトギス』の表紙絵・挿画・応用図案、文芸雑誌『趣味』第5巻第4号（易風社 1910.4）の木版絵、『現代俳画集』春之部（俳画堂 1915）の木版挿画などの制作がある。【文献】『描かれた明治ニッポン～石版画〔リトグラフ〕の時代～』展図録（神戸市立博物館ほか 2002）／『隠れた巨匠』展冊子（東村山ふるさと歴史館 2004）／寺口敦治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所 2005）／『為山略年表』『子規派の画人・為人』小冊子（きらめき 2015春号 vol.84 松山市文化協会 2015.4）（樋口）

下村観山（しもむら・かんざん） 1873～1930

1873（明治6）年4月10日和歌山県に生まれる。本名

晴三郎。1881年東京に移り住み、狩野芳崖・橋本雅邦に師事する。1889年東京美術学校の第一期生として入学、同期に横山大観・西郷孤月らがいた。この頃より観山と号す。1894年2月に同校を卒業し、3月より同校助教となるが、1898年の校長岡倉天心辞職に際して、天心に従って同校を辞し、天心・大観とともに日本美術院の創設に携わる。五浦時代を経て、1901年東京美術学校復職して、教授に任命される。1903年から1905年にかけて英国に留学し、欧州各地を巡る。1908年同校教授を辞任。1914年横山大観とともに日本美術院を再興し、同院代表画家の一人として活躍した。1913年実業家・原三溪の招きで横浜本牧に移り住み、1930(昭和5)年5月10日逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921)に1図と前田青邨・安田靉彦・小林古径らと合作の木版画集『傳教大師御絵伝』(比叡山延暦寺 1929)に1図の制作がある。【文献】『開館記念特別展 下村観山』図録(山種美術館 1980)／『山田書店新収美術目録』50(2002秋)／『生誕140年記念 下村観山展』図録(横浜美術館 2013)(樋口)

下村孝次(しもむら・こうじ)

1936年8月8・9日の両日、西田武雄を講師に招いて開催の京都エッチング講習会(中井平三郎幹事 関西小国民社会場)に参加。『エッチング』47号(1936.9)に「エッチング雑感」、『同』64号(1938.2)に「エッチング禮讚」を寄稿。当時エッチング研究所製のプレス機を所有し、京都エッチング協会会員に名を連ねる。【文献】『エッチング』47・64(樋口)

秋方(しゅうほう) ➡ 瀧 秋方(たき・しゅうほう)

秀木(しゅうぼく)

前田青邨・安田靉彦・下村観山らと合作の木版画集『傳教大師御絵伝』(比叡山延暦寺 1929)に木版画1図を制作。【文献】『山田書店新収目録』50(2002秋)(樋口)

春宵(しゅんしょう)

三好米吉発行の『柳屋』47号〔上方趣味の巻〕(1932.10.9)の広告欄に、「春宵氏画」による〔木版画〕《新橋駅》《歌舞伎座》(『新錦絵東京名所』2枚 壱円)刊行の広告が掲載されているが、作品は未見。(樋口)

松雲(しょううん) ➡ 湯川松雲(ゆかわ・しょううん)

庄田鶴友(しょうだ・かくゆう) 1879～1948

1879(明治12)年9月28日奈良県柳生村に生まれる。本名常喜。鶴友、暁観とも号す。1898年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。山元春挙に師事。1907年第1回文展に『海辺』で入選以降は1918年の第12回文展までほぼ毎回出品を続け、この間1910年に京都市立絵画専門学校助教となり、のち教授として1922年まで後進の指導にあたる。1919年の第1回帝展開催に際しては、反官展を標榜する画家たちにより結成された日本自由画壇に創立同人として参加。1931年脱退して、1933年の第14回帝展より官展に復帰し、帝展・文展・新文展に出品を続けた。山水画と風景画を得意とする。1948(昭和23)年4月25日京都で逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921)に『伏見の里』1図を制作。【文献】『山田書店新収美術目録』81(2008

春)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)(樋口)

庄田耕峯(しょうだ・こうほう) 1877～1924

1877(明治10)年9月25日東京神田に生まれる。狩野快庵編『狂歌人名辞典』(広田書店 1928)によれば「名は完、尾形月耕の門人にして風俗画を善くす、傍ら雲の屋峰助の号を以て狂歌を詠ず、大正十三年七月一日歿す、年四十八」とある。1895年日本青年絵画協会第4回絵画共進会に『人形舞図』で三等褒状を受賞。1907年文展開催にあたっては、国画玉成会の結成に参加するが、絵を描いていたのは30歳頃までで、その後は絵筆を断ち、根岸に住んでもっぱら雲遊家峰助、連辞公子などの雅号で狂詩や狂歌などの制作に転じたと言われている。1924(大正13)年7月1日逝去。版画の制作は、明治末から大正期にかけて、縮緬本出版の版元長谷川(後に版元西宮与作)から『大晦日(下町風景)』『月夜の湖畔』『夜の大橋』など浮世絵風な輸出用木版画の制作がある。【文献】『LIGHT IN DARKNESS: Women in Japanese Prints of Early Showa (1926 - 1945)』目録(Fisher Gallery, University Of Southern California)／『The new wave』(Hoti Japanese Prints 1993)／「明治の浮世絵師 庄田耕峯」japan.digitaldj-network.com/articles/21303.html)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)(樋口)

莊田スマ子(しょうだ・すまこ)

大分県大野郡では生野正義を中心に郡下の小学校教員を主体とした大野版画協会が設立され、版画誌『大野版画』(1933～1934)を発行する。その第1号(1933.12)に『ばら』を発表。「葉の脈があって良い」と版画誌『九州版画』の主宰者武藤完一が『大野版画』第2号(1934.2)に評を記している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

庄(莊)野宗之介(しょうの・そうのすけ) 1876～1958

1876(明治9)年9月7日福岡市伊崎浦に生まれる。伊甫と号す。1900年東京美術学校西洋画科を卒業後、研究科に在籍。美校では浅井忠に師事するが、浅井のパリ留学、京都工芸専門学校教授への転籍は、庄野にとり不運であった。しかし、在学中の1897年第8回明治美術会(10点)、翌年の創立10年記念展(13点)に水彩画・油絵を出品。1900年パリ万国博覧会、1904年セントルイス万国博覧会に出品。1903年第5回内国勸業博覧会に『針仕事』(油絵)を出品して褒状を受け、その活動には華々しいものがあつた。1902年の太平洋画会の結成に際しては、石井柏亭・天下藤次郎らと参加し、第1回展から7回展まで出品、その一方、庄野伊甫の名で1907年第1回文展に入選し、その後も帝展(9回展)、日展(8回・10回展)に入選している。在京中、和田万吉編『西洋笑話』(吉川弘文館 1904)の図版を描き、和田は「序」で「此編若し文字に於て始て読者の頤を解くに足らずとも、尚ほ画図に於て其眼を慰むることを得ば画家庄野宗之助君の功殊に没すべからず」と賞している。1904年(第9巻3号『鴨脚樹』)から1908年(第11巻10号『雨』)にかけて『ホトギス』の裏表紙絵や図版をたびたび描いている。また『平旦』第1号(1905.9)の石版図版『老婆』・第4号(1906.1)の附録絵葉書『日向ぼこり』を描き、『方寸』第1巻3号(1907.7)の表紙絵『昼帰』・第3巻1号(1909.1)に図版『子守』を描いている。学生時代の岩波茂雄とは「三十九年春三、四月頃、上野桜木町東漸院に移つて自炊して居た。同宿

に一高以来の友人で法科大学生の故人山本唯次、太平洋画会の画家である庄野宗之助（号伊甫）が居た」（安倍能成『岩波茂雄伝』93頁）という。1910年夏目漱石は横浜の渡辺銀行の渡辺和太郎が希望した庄野の「御婆さんの画」を斡旋している。その遺り取りの書簡の中で、漱石は「庄野君に七十円に負けぬかといふたら一厘も引けぬといふて来ました。僕は其手紙のうちに芸術家の気骨があらはれて居るのを見て非常に気に入りました。彼は貧乏である。しかも自己の画を百円よりも一厘も負からぬと云ふ。其裏面には自分の画にはそれ丈の労力の価を認めぬものは買つてくれなくてもよいと云う気概が躍つてゐる。たのもしい男であります。あれだから下宿でくすぶつて情けない生活をしてゐるのであります」（『漱石全集』第23巻「書簡・中」779）と記している。大正初頭に帰郷し、1922年から1933年まで大分県立日田中学校の図画教師となり、教え子に宇治山哲平がいる。1940年福岡県美術会の創立に参加し、以後県展を主な発表の場とした。1958（昭和33）年1月26日福岡で逝去。【文献】『伊甫・庄野宗之助画集』（大森せつ 1997.9）／谷口鉄雄『西日本画壇史』（西日本文化協会 1981.4）（森）

生野眞直（しょうの・まさなお）

大分県師範学校に学び、武藤完一より版画の指導を受ける。在学中の1930（昭和5）年に武藤の主宰する創作版画誌『木版』の第3号（1930.4）に《海近く》を、第4号（1930.10）に《柵のある風景》を発表。翌1931年3月に同校を卒業し、教員になったと推定されるが、木版画を続け、同年6月の新興版画会第1回展（東京、8月：大分出張展）に1点と、9月の日本版画協会第1回に《商店街》が入選。その間、8月に大分県師範学校で開催された創作版画講習会（講師・平塚運一）に参加し、講習会をきっかけに生まれた『彫りと摺り』（編集兼発行者・武藤完一）の第1～3・5・6・8号（1931.9～1933.6）と、その継続誌である『九州版画』の第2号（1934.1）、第4号（1934.7）に作品を発表したほか、静岡の『ゆうかり』第5・6合併、7・9・12・13、15・16合併号（1931.12～1933.7）にも作品を発表した。1934年8月には大分県師範学校で開かれたエッチング講習会（講師・西田武雄）に参加しているが、その時の肩書きは「師範学校専攻科」となっている。【文献】『日本版画協会第一回展出品目録』／『エッチング』22／『郷土図画』5（1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画雑誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002）／『創作版画誌の系譜』（三木）

生野正義（しょうの・まさよし） 1907～1977

1907（明治40）年、大分県大野郡三重町（現・豊後大野市）に生まれる。三重農業高校（現・大分県立三重総合高等学校）卒業後、三重女学校や大野郡下の小学校で教鞭をとる。1932年頃は、大分県大野郡戸上校に、その後大野郡牧口小学校に勤務。大分県師範学校の教員・武藤完一の主宰する版画誌『彫りと摺り』第2号（1931.11）に《校門》、第3号（1932.1）賀状号に《猿》、第4号（1932.6）に《大野川風景》、第5号（1932）に《睡蓮》、第6号（1932.12）に《風景》、第7号（1933.3）に《ストーブ》、第8号（1933.6）に《職場一景》を発表する。1933年の夏休みに大分県師範学校において第2回創作版画講習会（1933.8.1～5 講師：平塚運一）が開催され、此れを機に『彫りと摺り』は版画誌『九州版画』（1933～1941）と改題される。その第2号（1934.1）に《正月の玩具》、第3号（1934.4）に《犬

飼釜峡風景》、第4号（1934.7）に《風景》、第5号（1934.10）に《唐きび》、第6号（1935.1）に《みぐち茸》、第7号（1935.4）に《ありし日の天王寺》、第8号（1935.10）講習会記念号に《百日草》を発表。その間の1933年には生野が中心となり地元大野郡下の教員を主体に「大野版画協会」を設立。自ら編集者となって、版画誌『大野版画』（1933～34）を発行する。その第1号（1933.12）に《風景》、第2号（1934.2）賀状号に《犬》、第3号（1934.5）に《露の花》《エキスリブリス》、最終号となった第4号（1934.7）に《エキスリブリス》と表紙絵を発表。第1号の《風景》について、「本年夏の平塚運一氏の講習を受けての作品。（中略）単純化によって生まれる画面効果と構図と刀の切れ味をねらったところだ。」と作者言に版画へ向かう姿勢を言葉にしている。また、静岡の版画同人誌にも関係していて、『かけた壺』第23号（1934.7）に《風景》を、『ゆうかり』第21号（1934.9）に《静物》、第22号（1934.10）に《瀬戸の朝》を発表。大野郡三重町に在住し、戦後は三重高校（現・大分県立三重総合高等学校）において書道教育に尽力し、1977（昭和52）年に逝去した。【文献】『創作版画誌の系譜』／「大分県芸術会館蔵品検索システム」（インターネット検索）（加治）

白井数雄（しらい・かずお）

版木会発行の創作版画集『版』第11輯（1937.12）漫画集号、第12輯（1938.1）賀状集号に木版画各1点を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認。なお、目次等に作者名はあるが、作品名は記載されていない。【文献】『版』11・12（加治）

白井一二（しらい・かずじ） 1907～

1907（明治40）年、愛知県豊橋市に生まれる。1920年、商業学校に入学。この頃から本の虫になり、活動写真好きに。商業学校3年の頃、学校以外の友人らと詩誌『自画像』を発行し、商業学校卒業まで続く。1926年、東洋大学専門部倫理学東洋文学科に入学。東京小石川に下宿する。この頃、白山上の南天堂書房の階上で「東洋大学詩人協会」を発足させ、詩誌『白山詩人』を発行。1929年大学卒業と同時に終刊となる。大学生の時に、愛知県岡崎では村松隆次や小野英一らが版画誌『版画』（1925）を発行。第3号から短歌の同人誌『草原』と合併して、『試作』（1925～1926）と改題。白井は『試作』第3号（1925.12）に《路》、第2巻1号（1926.2）では裏表紙の木版カットを発表している。大学卒業後は豊橋に戻り、私立豊橋商業学校、その後は母校の豊橋松葉尋常小学校、豊橋高等家政女学校の教諭として勤務。この頃から、「白井麦生」と号し、俳諧を楽しむ。多趣味で、書画を好み、郷土の浮世絵を集めた。戦争が激しくなった1944年以降は大日本兵器株式会社第三製作所豊橋工場で働く。戦後は疎開しておいた蔵書の洋本を元に古本屋を始める。1998年には『麦生雑纂：白井麦生の生涯』として自伝を上梓。戦前にも白井一二編で『あびす国の船じるし』（徳国文庫 1938）や『一九二八年の一部：白山詩人同人詩集』（白山詩人社 1928）などを出版している。【文献】白井一二著『麦生雑纂：白井麦生の生涯』（白文堂書店 1998）／『創作版画誌の系譜』（加治）

白井壮太郎 (しらい・そうたろう)

版画家・逸見享は詩人・大手拓次のために詩と版画の同人誌『異香』を発行するが、第1輯のみで終刊。白井はその第1輯(1917.1)に『誘惑の時』《秋暮るる日》を、それに加えて表紙絵《日光に浴してよろこぶ女たち》、裏表紙カットに《壺を抱ける女》を発表する。この『異香』の木版画による逸見の扉絵や白井の版画からは、象徴派的でモダンな大正期の雰囲気を読み取ることが出来る。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

白井卓治 (しらい・たくじ)

1936年9月23日豊橋中学校で開催の豊橋エッチング協会例会に参加。豊橋エッチング協会会員に名を連ねるが、作品は未見。【文献】『エッチング』48(1936.10)(樋口)

白壁 康 (しらかべ・やすし) 1908～1997

1908(明治41)年熊本県宇土市に生まれる。和田英作に師事。1937年第12回国画会に油彩画《樹間早春》が初入選。その後は創元会・一水会などに出品。1946年大分県竹田市久住町に移り住み、久住やシルクロードの風景などを描く。1976年一水会会員となる。1997(平成9)年逝去。版画の制作は、木版画《南アルプス連山》1・2・3(『山の版画集第二』1938 各25×34.3cm)が知られる。【文献】『版画 80年の軌跡 明治初年から昭和20年まで』図録(町田市立国際版画美術館 1996) / 「ふるさとの画家・白壁康記念絵画展」パンフレット(竹田市役所 2014)(樋口)

白川雄四郎 (しらかわ・ゆうしろう)

長野県下の教師による下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号(1934.9)に《静夜》、第3号(1936.7)に《夏の山》、第4号(1937.7)に《或る国の外相》、第5号(1938.3)に《歩哨》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

代田恒夫 (しろた・つねお) 1894～1989

1894(明治27)年5月15日札幌に生まれる。1920年日本大学専門部高等師範科を卒業。小学校教員として勤務する傍ら、本郷洋画研究所に学び、1923年第10回光風会に油彩画《夜の花》が初入選。その後、同展の第12回展(1925)から第17回展(1930)、第22・24・25・28回展(1935・37・38・41)に出品。また、1926年の第3回白日会にも油彩画《早春》が入選し、同展の第4・5・7・8回展(1927・28・30・31)に出品したほか、1940年の第4回海洋美術展、1941年の第1回航空美術展、1943年の第2回大東亜戦争美術展にも出品を重ねている。版画は、1930年代に銅版画を始めたようで、1933年の『エッチング』第8・13号(6月・11月)に作品図版が掲載され、翌年の第22号(8月)には「研究所エッチングプレス所有者」として紹介されているが、当時の肩書は「豊島師範学校附属小学校訓導」となっている。また、1936年の第45号(7月)に「品川の埋立地」を寄稿し、エッチング《機械》の図版と共に掲載されている。1941年には日本版画協会の第10回展に銅版画《工作》《蘭印スケッチ》が初入選。翌年の第11回展にも《ボンガオ島(ヒリツピン群島南端)》が入選。1944年会友に推挙され、同年の第13回展にドライポイント《学徒作業》を出品した。戦後も再開展である1946年の第14回展にドライポイント《池》《三つの舟》を出品。会員に推挙され、1960年に退会するまで同展の

常連として活躍した。また光風会展へも出品し、第33・35～37・39・40回展(1947・49～51・53・54)に油彩画を出品している。1989(平成元)年6月6日小金井市で逝去。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『第85回記念光風会目録集』(1999) / 『エッチング』8・13・22・45 / 『日本版画協会史 1931 - 2012』(2012) / 「遺族提供資料」(三木)

城山吐峰 (しろやま・とほう)

未来派美術協会の後藤忠光が主宰したグループ「青美社」が発行した版画と詩の雑誌、『青美』創刊号(1921.4)に《カフエーの夜》《春》《夢幻の響き》《踊り狂う群れ》の4点の木版画(リノカットの可能性もあり)を寄せた。【文献】『町田市立国際版画美術館紀要』3(1999) / 『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)(滝沢)

新栄 (しんえい)

大正15年頃制作の《鴈治郎の紙治》《おわさ》など木版役者絵3図を確認。版元は松木平吉ともいわれるが、詳細は不明。【文献】『山田書店新収目録』24・42(1997.4・2000.10) / Helen Merrit and Naoko Yamada 著『Guide to Modern Japanese Woodblock Prints 1900 - 1975』(University of Hawaii Press; Reprint edition 1995) / 『浮世絵新入手速報』52(美術店絵草子 2015.4)(樋口)

新開与作 (しんかい・よさく)

徳力富吉郎が指導する丹緑会発行の『版 小品集』(1931頃と推定)に井上豊久・和泉凡・秦徳三・北村勤次郎・水内平一郎・森沢謙三らと共に新開与作も木版画《〔鉄路風景〕》1点を寄せる。同版画集について徳力は、「作者は主として私が指導して居る人々で、いづれおとらぬ版画愛好者達です。(中略)大作はそれぞれの展覧会に出品して、小品は今後此の集に号を追って載せて行く事にし度いと思ひます。(中略)可愛い、画集が順々生まれて行く事を楽しみにしてゐます」と表紙裏に一文を記す。【文献】『版 小品集』 / 岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府立総合資料館紀要』12(1984)(樋口)

眞太郎 (しんたろう)

東京神田で発行された版画同人誌『艸と風』第1輯(発行年不明)に《郊外》《土手場》、第2輯(1931.3)に《通学》《習作〔1〕》《習作〔2〕》、第3輯(1931.7)に《エキス・リブリス》2点を発表。苗字の記載はなく、眞太郎は画号として使われている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

進藤一郎 (しんどう・いちろう)

1931年8月、武藤完一の尽力で大分県師範学校において3日から7日まで5日間開催された創作版画講習会(創作版画倶楽部(中島重太郎)主宰、平塚運一講師)に参加する。同講習会を記念して、参加者の作品を貼付して刊行された版画誌『彫りと摺り』創刊号(大分県師範学校内・版画研究会 1931.9)に木版画《ひなげし》が掲載される。【文献】『郷土図画』1-5(大分県教育研究会 1931.10) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

進藤孝之 (しんどう・たかゆき)

飛騨高山の守洞春が中心となって発行した版画誌『版 糸』慰問号(1938)に木版画を発表。【文献】『創作版画

神保朋世 (じんぼ・ともよ) 1901 ~ 1994

1901 (明治 34) 年 11 月 27 日 (戸籍上は明治 35 年 4 月 25 日)、日本橋・葉研堀に生れる。牡丹園経営の父三吉、母マサの三男一女の長男。本名は貞三郎。1917 (大正 6) 年に朝日新聞社給仕として入社。その後、挿絵画家として名声のあった鱒崎英朋のもとに通いとして入門。「朋」の一字をもらい「朋世」の号を受ける。1920 年の『娯楽雑誌』に師匠の斡旋で挿絵を描いたのを始め、挿絵の代表作は野村胡堂の「銭形平次捕物控」で、1933 年 10 月『オール読物』の挿絵掲載から担当したのが知られる。その他、雑誌では大正末の『講談倶楽部』、昭和期の『文芸倶楽部』、『富士』、『キング』などで活躍。1937 年、上野忠雅・名取春仙等と「劇画院」を結成し、展覧会を開催。1940 年、挿絵の仕事辞めて本画家へ道を求めて、伊東深水に師事。1949 年 7 月の『オール読物』、野村胡堂「銭形平次捕物控」から読者の熱望に応じて挿絵を再開。1982 年 6 月には小田急本店画廊で日本画個展を開催。版画には、1937 年 8 月に『神保朋世木版画集』を刊行する「神保朋世版画研究会」(自宅)を自ら組織し、私家版として、第一集《春宵》、第二集《夜情》、第三集《雨後》を刊行。三集共に彫佐藤寿録吉・摺猪村正之助が担当。この他にも 1938 年 9 月の美人画《雨》をはじめ、1939 年 1 月の《ほろ酔い》、1980 年 6 月の《静夜》、1981 年 3 月の《あたゝか》など美人画 8 点と《芭蕉翁之図》があるとのこと (未確認)。俳句にも熱心で俳誌『窓』を主宰。また「俳画芸術院」結成にも参加。著書に『耽美うき世絵ばなし』(芳賀書店 1967)がある。1994 (平成 6) 年 3 月 10 日逝去。享年 93。【文献】『最後の浮世絵師 神保朋世展』(弥生美術館 1997) / 『おんな 近代美人版画全集』(阿部出版 2000) / 『浮世絵大辞典』(国際浮世絵学会・東京堂 2008「神保朋世」項目参照)(岩切)

新見 孝 (虚舟) (しんみ・たかし/きょしゅう) 1904 ~ 1955

1904 (明治 37) 年 4 月 26 日名古屋市に生まれる。1924 年京都絵画専門学校に入学。在学中の 1927 年の第 6 回国画創作協会展に日本画《海苔乾す早春》が入選。「虚舟」と号する。1928 年絵専本科を卒業し、研究科に進む。同年の第 7 回国画創作協会展に日本画《漁港》《市の立つ日》が入選するも、国画創作協会第一部(日本画)は解散。同志と「新樹社」を結成し、この頃から土田麦僊に師事する。また、この年(1928)の第 9 回帝展に木版画《大島の女》が入選している。1933 年絵専研究科を修了。1934 年の第 15 回帝展、1936 年の改組第 1 回帝展に日本画が入選するも、同年(1936)師土田麦僊が逝去。このことを契機に官展から離れ、旧麦僊塾の仲間である林司馬ら 5 名と自主研究会「柏舟社」を結成し、1939 年には第 1 回展(銀座・松坂屋)を開催。1942 年には二科会に出品する洋画家と「三三美術団」を結成した。戦後は 1946 年の第 1 回日展に日本画を出品したが、1948 年頃から洋画に転じ、1954 年から自由美術家協会展に出品し、1964 年に会員となっている。また、1951 年には徳力富吉郎・亀井玄兵衛らと「京都版画協会」を結成。1962 年にはアメリカのシンシナティ美術館主催の国際版画展に出品している。1995 (平成 7) 年 7 月 18 日逝去。【文献】『国画創作協会の全貌』(光村推古書院 1996) / 岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12 (1984) (三木)